

トラクターがうなり、荒野が緑野に変わる日も近い。



農業現代化のあけぼの

黒竜江省の国営農場を見る

陳英

荒地へ進軍

中国では現在、北部の辺境から広東省の南中国海の浜辺まで、新疆の天山のふもとから、西南山岳地帯にいたるまで、耕地づくり二億一、二五〇万ヘクタールをめざして進軍ラッパが鳴りひびいている。

これは国民経済発展の八カ年プロジェクトを履行し、四つの現代化を実現して農業の基礎をうちたてるための重要な措置である。

昨年秋、鄧小平副総理が日本を訪問したとき、記者の質問にこたえて、つぎのように言ったことがある。四つの現代化のなかでは、農業の現代化がいちばん困難である。

そのわけをすばり言えば、まことに簡単に、周知のように、中国の農業は、世界の全耕地面積の七割を占める耕地で、世界の五分の一をこえる人口を養わねばならない。これは大きな矛盾で、この矛盾を解決するために、二つの面から手をつけている。一つはこれまでの農地をよくつくり収量をひきあげること、二つは耕地面積をひろげて、農作物の総生産量

大がかりな計画的開墾

三江平原は、黒竜江省の東部に位し、黒竜江、松花江、烏蘇里江の合流するデルタ地帯および倭肯河や穆稜河流域を含む。

記者は、一九七八年に一五万ヘクタールを開墾した五星農場を訪れた。春にはまだながい眠りをむさぼっていた湿地や荒草の土地が人々の半年にわたる苦勞により、いまでは、いたるところで豊作の情景がみられる農場となっている。取り入れを待つばかりの大豆が黄金のジュウタンとなつて、はてしない大地に敷きつめられている。農場長の丁元喜さんが口を開く。

「ことしの大豆は一、あたり一二〇ヘクタールを越すところまで行きそうですよ。(普通は一、あたり七〇ヘクタール程度、みなこの新規に開墾した土地で出来た大豆です。開墾する荒地は、毎年むらなくよく穫れる畑にしてしまふ。開墾したその年に収穫し同じ年に国家にも貢献する——これがわれわれのスローガンです」

五星農場がある所は季節的に、時によると一年中、水が出る沼沢地であった。一九七七年の冬、大地が凍結してから、農場は調査班を荒原の奥地にまで送りこみ、調査をし、企画をたてた。荒野は氣候、地形、土壌、水、植被、動物などからなるひとつの生き物で、長期にわたつて自然のバランスを保っている。だから大面積の開拓はしっかりと科学的調査をしたうえでとりかかなければならぬ。この点、かれらには苦い経験があった。ただ盲目的に開拓したため、自然環境

である。かつて日本軍国主義に占領されていた一九三〇年代から四〇年代の中頃にかけて開拓団による大規模な入植がおこなわれ、荒地開墾に手がつけられたことがあったが、戦況は緊迫するし、自然条件が極度に困難であることが分かったため、結局、もとのままに放置されたのである。新中国誕生後、一九五六年から開始された開墾によって、耕地と化した荒地はすでに一七八〇万ヘクタールに達しており、毎年穀物、大豆約二五〇万トンを生産して、わが国の重要な食糧生産基地の一つになっている。科学調査によって、黒竜江省には荒蕪地が一億一〇〇〇万ヘクタールがわかつているので、土地の国営農場と人民公社は、一九八五年までにさらに七〇〇〇万ヘクタールの開墾を行ない、穀物の総生産量を現在の三、四倍にまで高めたいと、意気込んでいます。

大がかりな荒地開墾の組織的な指導を強化するために、黒竜江省は三江平原開発建設指揮部を発足させ、それにとともに、